

1年間を振り返って

看護学科第42期生 小林 千晶

私は准看護学校卒業後、准看護師として病院勤務する中で、術後患者の血圧高値に対して何が原因でどうしたらいいのか分からず、すぐにアセスメントが出来ないことがありました。先輩看護師に相談すると次の対応を冷静にアドバイスしてくれて、動揺していた自分が先輩看護師のおかげで落ち着いて患者と向き合うことができました。先輩看護師の短時間での確かな判断をみて、患者を理解するために勉強したいと思うようになりました。

患者は複数の疾患をもっていることが多いため、知識を深め、個別性に応じたコミュニケーションが大切であることを実感しました。特に知識では、患者の訴えや客観的情報に対して、多角的な視点からアセスメントを行うため、知識の引き出しを増やしていく必要性を感じました。働く中で、足りない知識を学び補いたい気持ち、患者をもっと理解し、寄り添えるようになりたいと思い、入学しました。

入学してからは、仕事、学校、3人の子どもの育児にPTA活動、家事の合間に勉強と多忙な日々であつという間に1年が経ちました。入学当初は、学びたい気持ちの半面、育児や仕事、学校と両立できるか、勉強する時間の確保やモチベーションは保てるのだろうかと気持ちばかりが先走り不安でいっぱいでした。しかし、42期生のクラスメイトには、同じように子育てをしながら通っている仲間、何年か准看護師として現場を経験してきた後、通い始めた仲間がいました。それぞれが様々な不安を抱えつつも、頑張りたいと思い入学してきた仲間が多く、お互いを励ましながら学び合えることに楽しさを覚えました。

准看護学校と比較し、知識がより広く深くなっており、今まで点と点の知識だったものが線となり繋がっていくことを学んでいく中で実感しています。また、学校で学んだ知識が臨床現場で根拠となって活かされ、学ぶことの価値を感じています。

私は子育てをしながら看護学校に通っていることに関して、職場で「人生、遠回りをしすぎてしまった」と漏らしたことがあります。しかし、看護師から、「遠回りをしてきたからこそ自分たちには見えない部分が見えることもあるから、無駄なことはないよ」という言葉に励まされたことがあります。学ぶことに遅いも早いもないということに気づき、学びたいと思ったときに行動し、努力することで、結果として自分の知識の糧になると思えました。

私が今学校に通えているのは、家族の協力、職場のスタッフの応援、学校の先生のサポート、お互い高め合えるクラスメイトがいるからだと思います。この環境を当たり前と思うことなく、今後も学業に励んでいきたいと思っています。